
トロイメライを忘れる日まで

北本彩和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トロイメライを忘れる日まで

【Nコード】

N2054B

【作者名】

北本彩和

【あらすじ】

高校に入学した春。普通な人のはずの隣の席の人がとても気になる。階段を怖がるそいつと階段からおちたら、見えないはずのものが現えて…。

1（前書き）

サイキックアクションなどの劇的なものをお求めの方にはおすす
めできません。

どちらかというと女性向きです。

授業中、隣の席の山名彰がメガネをかけているのを見て、日本人って近視が多いってほんとなんだろうなあと彼は思った。日本人以外がどうなのか知っているわけでもないのに。

佐々木亮は、「りょう」と読まれがちだが「あきら」という名前の彼は、入学式の日に「山名彰」という名前をクラス発表で見出し、「しょう」か？「あきら」か？と思って以来、このクラスメイトを気にしている。そう思われることはあっても、思ったのは初めてだったから、新鮮だった。

彼の目に映る山名は、ナンカチガウ人だった。服装を見ても、どこがおかしいというわけじゃない。一つの違反もせずに制服を着ている。きちんとアイロンのかかった水色のワイシャツときれいな結び目の臍脂にストライプのネクタイ。優等生のサンプルみたいな、ただしこの学校ではありがちな姿。

亮には少し窮屈そうに見える。

山名は第一ボタンを外すこともせずにネクタイを締めて、暑い時でも必ず長袖を着ている。髪は日光に当たると琥珀みたいな色。蛍光灯の下では少し茶色いという程度の色だったが。

普通なんだけどなあ、と違和感の理由が亮にはわからない。

この席になって二週間たった今でも、彼は山名彰に話しかけられたことがない。彼はあまり他人と話すのが得意ではないらしいし、亮の方でも今まで彼がつるんできた友人達と山名はだいぶ違う。

亮は話しかける口実を見つけられずにいる。ぼーっとしているように、彼には意外と隙がない。

猫みたいな生き物だ。犬みたいに親しげでなく、ハムスターみたいに何も考えていないわけでもない。何を見ているかわからない、不可解な生物。

そんな山名の苦手なものを亮は一つ知っている。

階段だ。

移動教室で歩いていると、誰もいない階段の前に一人で立っている山名を見つけた。彼はそこに立ったまま動かない。視線の先に何かがいるというわけでもない。

この場面が強く印象に残っているから、風の色を見る猫みたいな奴だと亮は思うのかもしれない。

彼の足音で、山名は勢いよく振り向いた。

あまりの勢いに亮は驚いた。驚いたが、知らない振りをして階段を上った。

亮が階段を上がると、二段後ろを彼がついてきた。訝しく思っただけ振り返って見ると、山名は大まじめな顔で亮の足を見ていた。

「なんかあった？」

上りきってから聞いてみた。

「ちよつとね」

「何かいた？」

「いや別に。でも階段は……。佐々木君だったわけ？」

「そう、佐々木亮。山名もあきらだったよな？」

「なんで知ってるの？ 佐々木君はクラスメイトの名前とかどうでも良さそうだけど」

「あきらだから。亮でいい。みんなそう呼ぶ」

「遠慮する。自分の名前呼ぶみたいでヘンな感じだから」

「そうか。でも君付けは気色悪いからやめてくれ」

だいぶ前のその会話以来話していない。話したいとは思うものの、話すことがないからしかたない。

この席になって以来話しかける代わりに、横目で彼を伺う癖がついてしまった。

「山名いつもはコンタクトだったんだ？」

休み時間になって銀縁メガネの友達に言われているのを横で聞いていた。このクラスの委員長、春の自己紹介で中学では生徒会長だったと言った奴だ。

春の自己紹介は驚いた。このクラスだけで生徒会長経験者が三人、役員経験者が六人いた。四十五人のこのクラスの五分の一が生徒会経験者。

どんなとこ来ちゃったんだかな。

同じ中学の友達と一緒にの学校を受ける、なんて又ルイことをする趣味はない亮だが、早まったことをしたかと四月は後悔したものだ。「二週間使い捨てのソフトだったんだけど、朝破いちゃってさ。メガネ嫌いなんだけど」

苦笑いしながら彼は席を立った。次は選択授業だ。二人が教室を出るのを見送ってから自分も荷物を持って教室を出た。

美術。得意なわけではない。書道と美術と音楽の中から選ばなければならなかった。書道は硯とか毎回用意するのがめんどくさそうだからやめた。音楽は合唱することになったらいやだからやめた。

よってたかつて歌なんか歌って何が楽しいのかわからん。歌いたい奴は歌え。ただし俺はいやだ。

美術はスケッチという名目で、校内のどこにいてもいいということが多い。絵が好きということもなかったけれど、だからこの授業は気に入っている。

亮はこの日は四階と三階を繋ぐ東階段にいた。三階には美術室が、四階には音楽室がある。彼は踊り場より上側の階段に座って、踊り場の窓から外を見ていた。

薄汚れた白い壁を切り抜くアルミサッシの銀色の枠。学校の敷地を囲むようにに植えられた緑と青い空、遠くに見える鏡張りの超高層。アルミの額の中にバランス良く、彩り良く収まっている。

箱庭みたいだと思う。窓の外に比べたら窓の中の、こちら側が箱の中。そのはずなのに、窓の外は嘘くさい。真夏でも冷たい壁の感触やどこかの教室から聞こえる教師の声に比べると、窓の外は偽物めいて見える。白い太陽も風にそよぐ木も、まっすぐに立つ高層ビルも。良くできていすぎて、わざとらしい。模型をみているみたいだ。

変だ。感覚が狂ってる。学校という不自然な空間の方がリアリティーがある。学校の中の方が、広いはずの世界よりも更に大きい。大きな駅で、液晶画面の水槽を見たことがある。水の中を色とりどりの魚がゆらゆらと泳ぐ。本物の水槽の魚がいるのとかわからない。触ることのできない魚が本物でも偽物でも同じ。誰かが作ったプログラムも生き物も同じ価値だ。

道徳とか常識とか建前とか、いろんなものが肯定するまいとしていられるけど、生物に生きているということだけで他と比較できないような価値があるとはとうてい思えない。自分の感覚でつかめる物しか、俺にはわからない。

座っている階段は冷たくて硬い。

「…佐々木…？」

名前を呼ばれて亮が振り仰いだ。

「何やってんの？ 山名は」

立ち上がって返事をした彼に、彼はあからさまにホッとした顔をした。

「メガネケースに気を取られてペンケース教室に忘れたんだ」

亮を呼んだ声の不安げな揺らぎは完全に消えていた。黒板を見る必要がないため、彼はメガネをしていない。

一人で階段に来るのが嫌なら友達でも誘えばいいと亮は思う。授業を抜け出すというのはどんな理由でも楽しい。

一緒に抜けるような奴は…いないか。

山名がよく喋っている面子を思い浮かべて、即座に否定した。

「階段、苦手？」

「うん、階段自体が苦手ってわけじゃないんだけど。佐々木はこんなところで何してるんだ？」

「校内のスケッチ」

話しながら、山名彰は亮の方へ階段を下りてきた。どこことなく危なっかしいような気がして、彼はスケッチブックを下に置いて彼の様子を見守った。特に小さいというわけでもない同い年の男を危な

つかしいと思う自分に微かに疑問を持ったが。

「時間中どこにいてもいいんだっけ？　ちよつと羨ましい。音楽室は騒音酷いから」

「へー。何やってんの？　そんなにうるさいって」

「リズムの練習。ドラムスティックでゴムのシート置いて机叩いてる。テストあつて、その時はスネアドラムだけど。一クラス分の人数が机叩いてる。頭痛くなりそうだよ」

こめかみを抑える仕草をして顔を歪めた後、少し誇らしげにドラムロールができるようになったと彼は付け足した。

「へー。スゴイナ」

とりあえず棒読みで、彼は感心した振りをした。何が凄いかはわかっていない。

「！　うが！」

その時、階段を下りている途中だった山名彰が体勢を崩して、慌てた声を出した。悲鳴と言うほど甲高くないが、せっぱ詰まった声だ。

反射で手を伸ばしながら、もっと人間っぽい声出せよ、と亮は思った。本当に驚いた時や怖い時、悠長に悲鳴をあげられる人は意外と少ない。

そんなことを考えていられる余裕も一瞬のことで、彼の腕は掴めたが支えきれず、亮も落ちた。見た目が細いからといって、勢いのついた体を簡単に支えられるものではない。

亮は背中から、山名彰は顔から、踊り場に向かって落ちていった。

2（前書き）

ホラーではありませんが不可解なものが登場します。

「メガネ外しといてよかった。割れたら目に刺さって失明したかもしれない」

亮が気がついた時には、二人はなぜか階段に仲良く並んで座り込んでいた。

「！落ちてたよな！どうなってんだ？」

辺りを見回して、自分たちがおかしいだけでいつもと変わらない東階段だと確認しながら、彼は山名彰に訊くような口調で大きな独り言を言った。

「？ アイダに入っただけだ。初体験？ アイダに無意識に入る人間は、やっぱり少数派なんだな。誰かと一緒に入っただけは、そういえば初めてだ」

亮が掴んだままの腕を引き寄せた。余裕の顔で、テンション高めの山名彰の顔が歪んだ。

「痛い」

「うるさい」

それほど強くつかんだつもりはなかった。振りほどくように手を離れた。

「ゴメンナサイ。そんなつもりじゃなかったの。もっと痛かったよね。私のせいだ。ゴメンナサイ、ゴメンナサイ！もう、どうしたらいいか。私を庇おうとしたせいで」

急に気弱なことを言い出して、亮は焦った。慰めるのは苦手だ。

「…今の僕じゃないから。のんびりしてたから来たんだよ。なんで返事なんかしたの？」

不機嫌そうな山名の声。彼は横ではなく目の前に立っている。どうなっているのか、わからない。並んで階段に座っていたはずだ。改めて隣を見るとそこには、泣いている女。

「ゴメンナサイ。私、私…。手は？どこも痛めてない？大丈夫

？ そんなわけ…ないね」

この学校の制服を着た、ロングヘアの少女。学年はわからない。頬を次から次に涙が流れていく。彼女はそれを拭いもせずに、亮に縋ろうとする。

「なにぼーっとしてるんだよ？ 下りるよ」

「ぼーっとつて、えっ、コイツは？」

「いいから」

今度は山名が亮の腕をつかんで、急かして立たせた。なおも亮に縋りつこうとする少女を完全に無視して、山名は階段を下りた。それにひっぱられて亮も階段を下りきった。

「！ ええ？」

階段を下りきったとたん、少女が消えた。

「本当にアイダ初体験だったんだな。迂闊に返事したらだめだよ。

あの人、話し相手が欲しくてたまらないんだから。つかまる」

かき消えるとか霧散するとか薄れるとか、そういう消え方ではなかった。テレビのチャンネルを切り替えるみたいな、カチツと音がしそうな消え方。白昼夢を見たと言うには、硬質すぎるような現実への回帰。

「一回入ったら、癖になるよ。一回きりで終わらない。これから入る時は気をつけて」

「へ？」

自分の見たものが現実なのか、どう処理すればいいのかわからなくて、自分の世界に埋没しかけていた彼は、山名の言葉に反応した。「癖になるって？」

何を驚いているのかわからないという顔をして、山名は亮を見上げた。

「経験ではそうなる。小学校低学年ぐらいの時に初めて入ってから、僕は気づかない内に入るようになった。何かはわからないけど、入る人には理由があるんだよ、たぶん。理由がある限りは終わらない」それが何かわからないから入っちゃう癖をなおせないんだけどね、

と付け加えた。

「前に、春に、階段の前で立ってたのも、入ってたのか？」

「？ …… あー、あの時は入ってない。階段は入ることが多いから、通るの嫌だなあって思ってただけ」

「階段だけなのか？ …… その、入っちゃう所っていうのは」

「違う。どこでも。入る時は入る」

「…あの、さっき見た人は、幽霊、なのか？」

なぜか山名は笑いを堪えるような顔をした。

「幽霊、信じてる？ 安心しなよ、そんなものいるわけない。幽霊が人間の魂だとしてだ。百歩譲ってそれが姿を現すことができたとして、なんで服までそんなことができる？ 服にも魂が宿っていてそれが着用者と共に姿を現す？ ありえないって」

彼は幽霊は存在しないと主張する人がよく言うようなことを言っていて、ツチノコを信じている人を見守るような顔をした。優越感を滲ませた余裕の顔だ。

「じゃあ、あれは何だったんだよ」

幽霊という以外、適当な説明を見つけられない。心霊体験に疎い自覚はある。みんなが怖がる心霊写真を見ても、どこに霊が映っているのかわからなかったこともある。自分は不思議体験は初心者で、若葉マークだ。

「たぶん、誰かの強い感情とか記憶。さっきの人は自分のせいで誰かが階段を落ちたことをずっと気にしてる。この学校の中では少数派の湿っぽい人」

ゴールド免許の山名は至って冷静に解説した。

「少数派？ 他にもいるのか」

「いるよ、たくさん。見たい？」

「いや、見たくない」

「遠慮せずに。これからちよくちよく見るハメになるんだし、今日案内するよ。いきなり一人で見たら怖いだろ？ 心の準備ができるように、今日は校内怪談巡りツアー」

放課後、部活の後教室で待ち合わせだ、と言いのこして彼はペンをケースを取りに行ってしまった。亮の返事も聞かずに。

山名彰は、あんなに喋る奴だったのか。

感慨深く思いながら、階段の上の方にあるスケッチブックを見上げる。階段を上ることが躊躇われる。

我ながら、律儀だよな。

一人きりでおやつのカレーパンを食べながら、亮は山名を待っていた。約束通り部活後の教室で。一年の内で最も長い日も、そろそろ傾いてきている。

部活動の後は、いくら食べても食べた気がしない。

「あ、ちゃんと待っていてくれたんだな。意外かも」

ドアから顔だけのぞかせて山名があっけらかんと言った。

「待ち合わせって言ったの、おまえだろ」

「うん、まあそうだけども。…ありがと。じゃあ行こうか。どっから行く?」

「どっからって?」

「よくある怪談ネタはそこそこそろってるよ。トイレの花子さん系列はないけど。校庭を走る二宮金次郎とか」

「ウチの学校、二宮金次郎ないだろ」

「ないけど、校庭をすっごいうれしそうに走り続ける人いるよ?」

かつてに鳴るピアノもあるし、体育館でボールはひとりでに跳ねるし」

「それで全部?」

「もっというけど、全部把握してるわけじゃないし、全部がいつも動いてるわけじゃないし」

教室の中がだんだん暗くなってくる。すぐ近くで話しているのに、表情を見ることができない。

階段でそうだったように、山名が違う人とすり替わっていてもすぐには気がつかないかもしれない。

「ベランダ。見える?」

亮の背後を山名は指さした。

驚いた。

教室同様、誰もいなかったはずのベランダに人が立っていた。ポニーテールの女子生徒。熱心に校庭を見つめている。

あまりに静かに、ひっそりと当たり前前に、そこにいる。その希薄さに驚いた。こちらに何かを訴えようという気持を彼女は持っていないようだった。

「何を見てるんだ？」

「さあ？ 告白できなかった好きな人がいたとか、そんなんじゃないかな？」

「わからないのか？」

「わからないよ。他人が考えてることなんかわかるはずない」

「階段では解説したじゃないか」

「だってそれは、…あの人が話すから」

確かに何か言っていた。すがりつくようにして謝っていた。

「俺には返事するなって言いながら、おまえは喋ってるんだ？」

ベランダの少女を見つめて、少し考えるそぶりをしてから山名は口を開いた。

「佐々木にはどう見えてた？ 階段の彼女は」

「髪の毛長いここの制服着た女」

亮は山名の意図がわからなかったが簡潔に答えた。

「髪、長いんだ？」

「長かっただろ？」

「僕には見えなかった。…知覚に制限がかかっているような感じ。声が聞こえる時は見えないし、逆に姿が見える時は何も聞こえない」

「でも女だって」

「それは声でわかる。同じ内容を聞いてるのかわからないけど」

亮は混乱した。同じ所で同じものを聞いても、違う話かもしれない。現実にはありえない。聞き間違いや聞き逃しとはレベルが違う。自分にはそこにいるものが、相手にはいない。

現実とは思えない。けれど夢でもない。

「さて、完全に日が落ちる前に、まずは校庭から行こうか？」

廊下に出ると、突然馬鹿笑いが聞こえてきた。走りながら笑っているらしく、声は亮達の方へ近づいてくる。

女子だ。半袖ブラウスに白いベストを着て最近あまり見ないルーズソックスを履いて、全速力で走りながら笑っている。顔だちはよく判別できないのに、マスカラを塗りたくったまっげは見えた。肩にかけた鞆で、キーホルダーがぶつかり合ってじゃらじゃら音を立てている。

派手な女だった。そんな奴が走ってきているというのに、山名はそちらを見ようともしなかった。

「見えてないのか？」

「何が？」

「今走っていった奴」

「見えてない。妙に楽しそうな声だとは思ったけど。これからサーティーワン行くんだって」

駅から学校までの通学路から離れると、そういえば確かサーティーワンがあった。

「笑い声しか聞こえなかったぞ」

「制限のかかりかたが違うんだ、たぶん」

話しながら階段を下り昇降口を抜け、二人は校庭を見渡せる渡り廊下までやって来た。

「…走ってるのは、一人じゃないんだな…」

「一人だなんて言ったか？」

マラソンのような走り方で、黙々とグラウンドを走っている人影がパラパラと散っている。校庭の隅の方に座っている人もいれば、紙パックのジュースを飲んでいる人もいる。かわったところでは、一人で走り幅跳びをしている人もいる。

薄暗い校庭で、まばらな人影が各々好き勝手なことをしている。

「黄昏って言葉を知ってる？」

亮は黙ったまま頷いた。

「『誰そ彼そ』が語源らしい、昼と夜との境目の時間のことだ。ど

ちらにも属さない。そこにいるのが誰かはつきり見えない、薄暗い時間。生きている人か、そうじゃないかわからない。昔からお化けの出やすい時間なんだ」

「この時間以外は見えないってことか？　だったら、階段は？」

「境目とか何かの間で見えやすくなるんだと思う。三階と四階の間だろ？」

そして今は学校自体が昼と夜の間にある。

「見える場所とか時間のことをアイダって呼ぶことにしてる」

名前のないままにしておくのは不安なんだ、と付け足しながら渡り廊下をそのまま歩いて、第一体育館までやってきた。

「ほら、よく学校の怪談に出てくるひとりでに跳ねるバスケットボール」

扉を開けて、山名が中を指さした。

ボールの跳ねる音と、バスケットシューズが床と擦れてキュウキュウいう音が響く。男バスのユニホームを着た人の群像。素早く動き回る人影。そのなかでバスケットボールだけが妙にリアルだ。

「おまえにはどう見えてるんだ？」

「ボールが跳ねてて、ちょっと不可解な影がチラチラしてる。それで足音と声が聞こえる。佐々木は？」

亮は説明しながら、本当に見え方が違うこと、その不思議を思った。

自分たちに共通して見えているボールは本物かもしれない。断続的に姿を現しながら動き回る人影に比べて、ボールの動きや一緒に動くその影は動きが自然だ。そう思って見ていると、人間には影がない。

このボールを奪ったらどうなるのだろうか？

コートの中に入ろうと踏み出した亮を山名が止めた。

「関わらない方が良い」

腕をつかまれて、亮は引つ張られるように体育館を出た。傾いていた日は完全に姿を消している。もう夜だ。

「タイムリミットだし、最後に生物室に行ってお終い」

「生物室って…」

たぶんご期待に添えると思うよ、と言って山名はニヤニヤ笑う。優等生の彼らしからぬ笑い。

亮の知る限り、生物室は怪談の宝庫だ。自分の内蔵を探す人体標本とか人間の胎児の標本とか。冷静に考えればあり得ない話なのに、ホルマリン臭い生物室はその空想を妙にリアルにする。カエルやミミズ、ネズミ等の標本が実際にあるせいかもしれないし、無闇に並んだ試験管やビーカーのせいかもしれない。中でも三角フラスコが胡散臭いと亮は思う。

ビーカーか丸形フラスコでどうにかしろよ。

二人で二階の廊下を歩く。二人分の足音が反響して、その残響に更に足音が重なる。普段足音が気にならないくらいうるさい場所なだけに不気味だ。いくつかの教室にはまだ人がいるらしく、明かりがついている。漏れる光が廊下を薄暗く照らしている。それでも九百人以上が詰め込まれていた箱が、がらがらの空洞になっているという感覚はどこか人を不安にさせる。

昼間でも人の少ない東階段の横が生物室。その隣は化学室だ。中央階段を上ってきた二人は化学室の前を横切って生物室に入った。当然教室の中は暗い。

ゴト、ウィーン、カタカタカタ

動くものが、いる。聞き慣れない音がする。

浮かび上がるような白さの骨が、亮の方に向かってくる。

「ヴー、ヴー」

人骨！ と思ってからそれが骨格標本だと思い至った。俺の胸の高さまでの身長。ハッキリしない声を発しながら、手を伸ばしてゆつくりと近づいてくる。机や椅子を避けて、床をミシミシならしながら。

背筋がぞつとして、鳥肌が立った。

筋肉も声帯もないのに、動いて声を出す。あり得ない、反則だ、

嘘だ。

亮は必死で否定したが、ついさっきまで現実にはいない人を何人も見ていた彼は、目の前で起きていることを、絶対にまやかしたとも言いきれない。

向かってくる骨が、不条理で次の行動が予測できなくて、心底怖かった。けれども横にいる山名を守らなければならないとも思った。

亮は骨格標本を視界から外さないようにしながら山名の方を向いた。目があった。彼は笑顔だった。骨格標本を見ずに亮を見ていた。そういえば生物室に俺を連れてきたのはこいつだった。

「驚いた？ 驚いた？ けっこー凄い顔してたよ。でも悲鳴上げるかと思つてたから、それが残念」

興奮した口調で山名が言った。亮は本気で怖かつただけに、その企みが成功した晴れ晴れとした顔の彼にむかついた。

突然教室の電気が点いた。部屋中くまなく蛍光灯が白い光で照らした。

「いやー、やつぱりこうでないとね。でも山名君、彼にも男のプライドつてものがあるから、それ以上驚いたかどうかに突っ込んだんじゃないめよ？」

白衣を着てノートパソコンを持った女だ。

おどけた調子で「はい」と山名が返事する。

「ところで君、せっかくだから『骨太くん』のダンスを是非見ていてくれないかな？ エアロビクスの動きを昨夜徹夜でプログラムしたの」

電気の下で見る、動く骨格標本『骨太くん』はただの骨格標本ではなかった。眼窩には小型カメラが内蔵され、各関節を動かす筋肉のようなケーブルがあり、足もたどたどしいながら動く。アシモではないが、二足歩行が可能だ。

カタカタという音に紛れて聞こえていたウーンという音はモーター音だったらしい。人を驚かすためだけに作つたとすればかなりのハイテクだ。

パソコンのスピーカーから流れる音に合わせて『骨太くん』が突如激しく動き出した。

ボックスを踏む骨格標本を見ることになるとは。ハイキックをす

ると足が、骨が飛びそうでドキドキする。ターンして手を叩くと、細かいプラスチック製品をぶつけた時のような力チャカチャした音になる。

毒気をぬかれた。ホラーを通りこしたユーモアがなくもない。

「どう？ 頭蓋骨に内蔵されたチューナーでパソコンからの命令を受信して動くようになってるの」

すばらしいだろうと胸をそらさんばかりの白衣の女が亮に説明する。

「先生、なんですか？」

二十代前半に見える白衣の女に亮は聞いた。先生と言うには幼すぎる気がして。

「杉山先生、生物の。一年の授業持っていないから佐々木は知らなかったのかも」

答えたのは山名だ。同じ一年なのにどうしておまえは知ってるんだ、そう思ったのが顔に出たらしかった。

「僕が入ってる科学同好会の顧問の先生なんだ」

「準備室に行かない？ コーヒーがそろそろ入る頃だから」

アルコールランプが燃えている。丸形プラスチックやガラス管を組み合わせた透明の器具の中で、透明の液体がボコボコ沸騰して、一番最後に茶色い液体が抽出される。コーヒーのサイフォンその物だ。

大きなビーカーに集めた不透明の液体を、杉山が三つのビーカーに注ぎ分けた。

「カップはないからこれで我慢して。…これはコーヒー用のビーカーで、薬品は入れたことないから」

人数分の薬さじとスティックシュガーとミルクを用意しながら言う。

亮は持ち上げたビーカーが予想以上に熱くなっていることに驚き、ヤケドするかもと思ったが、涼しい顔をしてブラックのままコーヒーを飲んだ。その横で山名は砂糖を一本とミルク二つを全部入れたコーヒーを、ハンカチでくるんで飲んでいた。杉山先生は砂糖しか

入れていないところを見ると、二つのミルクは始めから山名の分だったようだ。

「俺は何のためにここに連れてこられたんですか？」

亮の問いに杉山はにっこり笑い、山名はビーカーから目だけ上げて杉山を見た。

「『骨太クン』を見せて自慢のコーヒーを飲ませたかったから、ではもちろんないよ。佐々木君にアイダの人達がどう見えるのか、見てどう思ったのか、それを聞かせて貰おうと思ったの」

「聞いてどうするんですか？ 先生には見えないんですか？」

どうしたいんだろうねえと呟いてから杉山は見えないと言った。

「学校の七不思議をつくりたいの。ちゃんと七個。この学校ができてからまだ十数年。仕方ないことだけど学校に付き物の怪談話が少ないのよ」

「バカらし……」

思わず亮は溜息をついた。

「そう言わずに。佐々木君は話したくなるはずだよ？ さっきの君の驚いている姿を記録した映像があることを知ったらね」

「いつの間に」

「『骨太クン』の目は小型カメラだと言ったでしょ？ それに、例えば山名君が、アイダに初めて入った時のことを聞いてみたいと思っっているはずだよ。どういう条件下で、どういう人が入ってしまうのか、突き止めたいと全く思っていないって、佐々木君に言える？」

亮は黙った。もともと口の立つ方ではない。自分より背の低い教師を悔しげに睨むに止めた。

自分と山名の共通点を探ってみないと、事実彼は考えていた。見透かされているようで気に入らない。

「僕が話して気が済むなら、話すけど。聞く？」

「共通するのは、危険回避のためにアイダに入ってたってことだね」
山名の後に亮も話し、それを聞いて第一声がそれだった。

「だけどおかしいな、私は昔佐々木君と同じ階段で落ちた人を知ってる。その人は普通に落ちたよ」

飄々と語る杉山よりも余程痛そうな顔で山名は話を聞いていた。

「手首を捻挫して、肘もおかしくした。佐々木君は…運がよかったね」

三人とも黙った。暫し沈黙が流れた。山名は杉山のことをチラチラ見ながら心配そうな顔をしていた。

「私が不思議だと思うことは、二人ともアイダの人に会っても怖いとは思わないこと。泣いているとか表情はわかるのに、顔を認識できない。それが異常だとわかるのにどうして恐怖に結びつかないんだろうね」

「自分に危害を加えたり嫌なことしないから」

教師に対するいつもの口調より幾分くだけた、不器用な言葉で山名が答えた。

「そうだね。けれどそれは経験から知ったことでしょう？ 最初は相手がどういうものかもわからなかったはずだよ？」

帰り道、遅いから車で送ろうかという杉山先生の誘いを断って、亮と山名は並んで駅に向かって歩いていった。

「杉山先生って、変わってるな」

動く骨格標本を自慢したり、その骨格標本に『骨太クン』と名前をつけていたりしたことを思い出しながら言った。

夜空にはぼつりぼつりと星が浮かんでいる。等間隔に立つ外灯の光と、通り過ぎる車のヘッドランプに霞がちではあったが。

「昔からあんなだよ。でも懂れてた。年上の人に懂れる時期ってるだろ？」

あるだろ？　と言われてもそんな時期の来なかった亮は困る。それになぜ山名が杉山の昔を知っているのだろう。

彼女の顔をよく思い出そうとすると、細い顎や少し垂れぎみの目尻、血色の良い頬が思い浮かぶ。総合的に見て、悪くない方に分類できるかもしれない。美人とは言い切れなかったが、親しみやすい気さくなお姉さんとしてはいい線いってると亮も思う。

そして少しムツとした。

「そういえば勝手に鳴るピアノ見に行くの忘れたね。来週まで見れないよ」

「なんだそれ、曜日限定の幽霊って、ありなのか？」

「ん？　なしだろ。だからあれは幽霊じゃないんだって」

ごく軽い調子の返事に、そんなものかな、と思いながらも何かおかしいなと亮は思った。

「山名はあれは幽霊と違うつて確信してるけど、それってどういう根拠なんだ？」

「…幽霊なんていないから」

どことなく頑固な感じで山名が言い切ったところで二人は駅に着いた。お互いに反対方面の電車に乗るため、そこですぐに別れた。電車で揺られて、夢現で亮は考える。

今日、知らない世界、見過ぎたような気が、する。すごくする。

俺は今まで学校の中の方が外より広いと感じていた。その感覚は間違っていないかった。学校には今まで知らなかった深さがあった。でもどこかすつきりしない。

いつも見ている世界と少しずれたところに、重なるように存在する空間。自分は今まで知らなかった世界。何が引つかかるのだろう。それが杉山先生なのは間違いない。

彼女は学校に怪談の類が少ないと言った。だから踊る骨格標本で俺を驚かした。怪談を増やす気なんだろうとあの時は思った。

でも充分あるんじゃないのか？

第一体育館ではバスケットボールが跳ねる。校庭をランニングす

る奴等が何人もいる。階段で泣きながら謝る女がいる。廊下を笑いながら走る女がいる。まだ見ていないが音楽室ではピアノが鳴るらしい。それ以外にも、山名が把握しきれないほどいる。

少ないか？

山名は杉山にそのことを話していないのか？ それとも杉山が嘘をついただけなのか？

それに、俺と同じ階段から落ちた人がいると言っていた。それはいつだ？

「次ノ停車駅ハ―、モノイ―、モノイデス。オ降りノオ客様ハ…」
車内放送で一気に覚醒した。目を開けると、まばらな乗客はもう下りる体勢でいる。

停車した電車から鞆をひつつかんで慌てて降りた。駅から家へ自転車漕ぎながら、彼は車内での自分の思考を再現しようとして失敗した。だから、とりとめのないことを考えていたのだろうと、すっぱり思い出すのを諦めた。

5（後書き）

期待されている内容とずれてる気がします。

6（前書き）

女性向けです。そういった傾向に嫌悪を覚える方は読まないでください。

翌朝登校して、亮は山名に会った。同じクラスで席も隣なら当然だ。

おはようを言うでもなく、笑顔をつくるわけでもなく、昨日の放課後がなかったかのように、彼は亮を無視して目を逸らした。

亮は「おはよう」の「お」の口の予備動作で固まってしまった。朝から地味に傷ついた。

「佐々木君おはよう。どうかした？ 山名？」

山名とよくいる委員長だと思つて、ボソツと挨拶だけ返した。

「山名は名前を呼ばないと話しかけても返事しないよ、いっつも聞いてないんだか聞こえてないんだか知らないけどさ」

亮は背中を軽く叩かれてわかつたように頷かれた。何か誤解されているのではないかとか、思うところはあつたが黙つて頷いておいた。それを問いただすのは骨が折れそうだったし、弁解するのは誤解を深めそうだったので。

黙つたままでいる理由はそれだけだ。

「山名、おはよう」

自分の席で椅子をひきながら、亮は思いきつて声をかけた。内心、また無視されたら相当凹むよなと思ひながら。

「おはよー、佐々木。…ちよつと意外だった」

ぼんやり眠たげに、日向で眠る猫みたいな顔で、彼は目を細めて微笑んだ。

何が？

聞き返す暇もなく机に突つ伏して山名は寝てしまった。

日光が鋭角的に彼に向かつて差し込んでいる。朝の教室の喧噪から彼を守る矢のようだ。日に透けた髪が蜂蜜色に輝いている。

触れたら、そこから溶け出して消えてしまいそうだ。

慣れないことを考えている自分に気づいて、亮は慌てた。

絶対溶けないし！ だいたいこいつに溶けるとか消えるとか、そういう言葉が似合うはずない。昨日、俺を、生物教師と組んで、骨格標本で脅かしたあげく、驚く姿をからかおうとした奴だ。そういえば杉山に撮られた映像ってどうなったんだ？ 取り返すか消すかしないと、またそれをネタに絡まれるぞ。何で俺は昨日のうちにそれに気づかないんだ。俺は！ バカだろ絶対。そもそもあのふざけた教師、あんな骨格標本どこから見つけてきたんだよ。買ったのか？ 作ってたらどうするよ？ どうもしないけどさ。名前まで付けてさ、おかしいだろ、頭。

余計なことを追い出すための言葉が、頭の中で洪水を起こす。自分でもそれに押し流されてしまいたいと思いつつながら、彼はさっきの猫みたいな山名の顔を思い出してしまう。

枕にしている腕と髪の間から頬が少し覗いて、朝日のせいで眩しいくらい白く見える。

「何やってるんだよ」

始業時間ぎりぎりになってやっと教室にきた小野に、怪訝そうに声をかけられるまで、彼は真つ赤な顔で頭を抱えていた。

こういう感じになったのは初めてじゃない。けど、慣れるようなもんじゃない。

今は起きて眠たそうに授業を受ける彼を見直す。

どういう趣味だよ。男子校でもあるまいし。

休み時間になって、彼は小野の机まで行って聞いてみた。至ってマジメな顔で。

「山名って、どう？」

「どうってナニ？…山名、ね。あー山名君は、ちょっと不思議系とつか自分の世界持つてる感が強いけど、そこは好みの問題かな。ミステリアス？」

ミステリアスっていうよりはミステリー且つホラーだ。おまえは知らないから。

「で、よく見るとけっこう美人。雰囲気先行で見落としがちだけど。

両性に人気あるよ、性別が希薄な感じがするからだろうね」

にや〜と笑って、オレはもっと胸がある方が好みだと楽しげに小野は宣言した。

「俺も…」

「嘘はいけないよ」

どこか見透かすような顔で笑う。

「何がだ」

「ふーん。じゃあ何で急に山名君の話をしに、オレのどこまで来たのかな？」

素直になりなよとご満悦。亮は話す相手を間違えたか、と後悔した。

後悔先に立たず。ああ、まったくその通りだ。

悶々としているうちに時間だけが過ぎていく。亮は終始ぼんやりとするようになってしまった。自分らしくないと、本人でさえ思った。

6（後書き）

初期設定で彰はヒロインだったことを思い出しました。

「山名は名前を呼ばれないと返事をしないが、それは気がつかないからか？ それともそういう主義なのか？」

「たったこれだけのことを口にするまでに、一週間近くもかかってしまった。」

「主義だと思ってくれていいよ」

微妙な答え方だ。

「佐々木だったらわかるだろうからいいか。…あのさ、アイダに入っつてすぐは、僕には現実と区別がつかない。そしてアイダの人に迂闊に返事すると、話長いし、なかなか現実にもどって来れなくなる。だから現実の人だつて確信持てるまで返事しないことに決めてるんだ」

それと名前を呼ばれることとどんな関係がある？

「アイダの住人というのは話しかけてきても、だいたい僕には全く興味ないんだ。話を聞かせたいだけか、誰かと間違っているか。だから僕の名前を呼ばない。だから」

亮は納得した。

目の付け所が違うというか、慣れると細かいところまで気が回るようになるというか。自分が思いつきもしなかった理由を話されて驚いた。そういうえば現実とアイダは見た目ほとんど同じだ。

山名に校内怪談巡りをして以来、亮はアイダに入っていないので実感できなかった。できなかったが、そんな主義を持つほど頻繁に入ってしまうのは大変だろうと思っただし、驚いた。

「ふーん」

彼は自分から聞いておいたのにそんな相づちしか打てなかった。

「明日だけど、音楽室、行く？」

「ああ、行く」

気の利いたことはどうやっても言えそうにもないから即答した。

山名はうれしそうだったが、どこか意外そうな顔だった。

「怖くないか？」

「幽霊じゃないんだろ？」

「そうだけど…。じゃあ気持ち悪くない？」

「何が？」

「僕が…。たぶん、僕といたから見るんだよ？」

「…別に」

「そっか、じゃあまた明日」

山名の満面の笑顔は猫みたいだ。どこがどうとは言えないけれど、ほのぼのした気持ちになる。日向の匂いがしたかもしれない。

部活が終わり、荷物を取りに教室に戻った亮はホームルームの後のやり取りを反芻していた。薄暗く長い夏の日が傾きかけている。

誰そ彼そ、だったか。

ベランダにまた、思い詰めた顔で校庭を見る女がいる。

彼女の気持ちは、どうなったのだろうか？

「つと、いうわけで水曜日の放課後です」

「どういうわけだよ…」

聞いたら負けだとわかっているのに、いつもなら無言で流せたのに、今の彼は言わずにいられなかった。教室のドアを開けたとたんに宣言した彼は異様なテンションだ。亮は溜息をついた。

ツッコミも溜息も、なかったことにして山名は話を進めた。

ここに至るまでに、亮は疲れてしまっていた。彼の友人のせいでおもしろがっているのか親切なのか好奇心なのか、たぶん興味本位で、からかってくる小野のせいで。

「いつの間に二人は仲良くなったのかな？」

「今日の亮は落ち着きがないみたいだね」

「何？ 特別な日？ 二人の記念日なわけか。アニバーサリー？」

ことある毎に、否何もなくとも、小野は亮に絡んだ。その時の彼

は必要以上に生き活きしていた。水を得た魚というか何というか。同じネタでしつこいと、怒鳴りつけてやろうかと思った。

実際に怒鳴るところまではいかず、その絶妙のバランス感覚が羨ましいと心から思った。自分にはそういうものが足りていないような気がする。

人間黙っているだけではダメだ。

決意したのに、黙っていられるなら、貝になって海の底でひっそりと眠ってしまえるなら、と亮は思った。とても疲れていたのだ。

「ピアノの中をネズミが走っているとか、そういうオチはないのか？」

「ない」

期待を持たせない即答だ。しかも鼻で笑った。

「フタ開いてるしグランドピアノだよ？ 中を見てみてもいい。古一夜中の学校じゃあるまいし。鳴らすだけならネズミでもできる。」

「山名はピアノ弾けるのか？」

「少しなら。佐々木は？」

「全然」

ああそう、とまたもや軽く流された。弾けないとわかっていて、確認しただけだったからだろう。

「音楽室で毎週弾いてるのは、男なんだよ」

現実にはいない人のことを話しているにしては、山名はあまりに嬉しそうだった。興奮していて、口数が多くて、大げさで。話す相手が亮である必要はなさそうだった。

でも話を聞いて、自分たちは同類だと亮は確信した。

本物でもレプリカでも、自分に同じ効果があるなら同じ物だと山名も思っている。

アイダは液晶画面の水槽と同じ。ピアノを弾く男というプログラムが、水曜日になると起動する。

「いつも同じ曲なのか？」

「だいたい一緒。違う曲を弾く時もあるけど、トロイメライが一番多い」

曲名をだされても亮にはさっぱりどんな曲かわからない。山名の言い方はひけらかしている風でもなく自然で、それを知らないと言えなかった。山名にとってそれは知っていて当然のことらしかった。自分が物知らずなのをバラすことのように感じたから。

クラシックに詳しくなくてもあたりまえのはずなのに。

「山名はその曲、好きなのか？」

「好きだよ。懐かしい気持になる」

亮の心中を推し量る気もない山名はのんきに楽しげ。

二重のドアを開けると、飴色の旋律が流れていた。

クラシックをこんなに真剣に聴いたのも、きれいだと思ったのも初めてだった。

流動する時間を固めて、思い出を濃縮して閉じこめた色。セピアより透明度が高く、希望と胸を締め付ける後悔が生々しく残る。音に色があったなら、きっとそんな風に見えただろう。

どこかで聞いたことのある曲だ。

黄昏の薄闇の中の黒光りするピアノ、なめらかに白い鍵盤が奏でる音は、子供の頃の夢を思い出した時のような高揚感と苦さがあつた。

ピアノを弾いているのは、山名が言ったとおり男だった。この学校の制服を着た男。例によって顔が見えない。穏やかで幸せな表情をしているような気もしたし、悲しみを紛らわそうと努力している人のようにも思えた。

ピアノの音と同様に、彼のイメージもただ一つと決めることができない。

現実の人と同じだ。それ以上にリアルかもしれない。

ピアノを弾いているところを見ているだけなのに、彼が多面的な存在だと亮は思った。思いながら不思議だった。今まで他人をそんな風に捉えようとしたことがなかった。彼を見て急にそんなことを

考えた。

「トロイメライ？」

「そう。きれいだろ」

音を立てないように静かにドアを閉めて、二人は適当な席に座った。

ピアノを弾く彼は練習をしているらしく、一度弾き終わると同じところをくり返し弾いたり、片手だけで音色を確認するように弾いたりしている。

もっと鬼気迫る物を想像していた。拍子抜け。彼は楽しそうだ。

「しばらくすればわかると思うけど、その人一人じゃないんだよ」

言われて注意してみていると、彼は途中で目を上げて誰かと話しているみたいに口を動かしている。けれどもその声は聞こえなかったし、一緒にいるはずの誰かの姿も見えなかった。

「…楽しそうだね」

ぼつりと山名が呟いた。幸せそうな顔なのに、とても寂しそうな声だった。

亮は気づかなかったことにした。そして問いかける。

「山名は一番最初はなんのためにここに来たんだ？」

薄暗い放課後、誰もいないはずの音楽室に。

「…従兄弟ががこの卒業生なんだ。それで教えてくれたから、せっかくだから見てみようと思った。一人でここに入ってくる時は、凄いときどきした」

「そういう肝試しは一人でやるもんじゃないだろ。従兄弟もアイダに入る人だったんだ？」

「どうだろう？ でも僕は一人でここに来たかったんだ」

「従兄弟ってどんな人？」

「八歳年上で、僕と同じピアノ教室に通わされてたよ」

ピアノの音が急に止まった。

亮が振り返ると、そこには誰もいない。ピアノのフタも閉まっている。

「ピアノのフタとか、先週見たバスケットボールとか、物理的にどうなってるんだ？」

「わかるわけないだろ？　そういえば、アイダの人の腕をつかんだこともあったっけな」

アイダの中では視覚や聴覚で捉えられるだけでなく、彼らはちゃんと存在しているようだ。

音楽室は黄昏を抜け出して夜になった。

「サーティーワン、寄らない？　先週から誘いたかったんだけど、いい？」

夕暮れの余韻を断ち切るように、電気をつけて山名が言った。アイスクリームには心惹かれるものがあつたが、亮は断った。

「また今度、もっと明るい時間に行こう」

ミントグリーンやピンクと黄色のマーブルのアイスクリーム、それを飾る虹色のチョコスプレーや銀色のアラザン。どちらも青空の下で食べるのが似合う。亮はなんとなくそんなことを思った。

あいつは俺をどう思っているんだ？

最近彼が気になって仕方ない亮にとつて当然の疑問。

俺自身、自分の気持ちかわからない。他人にわかるはずない。

彼が見た中で、山名が一番いい顔をしていたのが今日の放課後だった。いつものキャラクターとは違っていた。興奮というのとも違う。不安定で、ちぐはぐだった。

楽しそうで嬉しそうなのに、寂しそうだった。

眠れない夜に寝返りを打つ。ベッドの上で一人、溜息をつく。

今の状況に、自分は順応し始めている。なんて適応力旺盛な俺。そうじゃなくて。

山名って、どう？

小野にした質問を自分に向かってする。

電波系？ まず浮かぶのがその言葉。そしてその電波系が気になって仕方ない自分。今となつては俺自身が電波系。アイダに入つて山名は幽霊じゃないと主張する人達を俺も見た。

認めたくねえ。

血が通っているのか疑問を持たせるような白い肌が急に頭をよぎる。アイロンのかかったワイシャツの襟から覗く首筋。日に透けた蜂蜜色の髪。

顔が熱くなる。ベッドの中で、枕を抱えてのたうち回る。

ありえねー。うん、ない。何も思っていない。

必死で日向の猫のような姿を打ち消す。

そう、そんなことより、音楽室の幽霊！ いや、幽霊とは違うらしいんだけど。ピアノを弾く男。

幽霊とは何だ？ 山名はそれはいないと否定する。そのくせアイダに疑問を持っていない。アイダの住人と幽霊は何が違う？

確かに幽霊でイメージしているものと奴等は違う。足があるし透

けていない、それに悪意を持っていない。殺したいとか憎いとか、もつと軽く驚かそうとか、そんな気持ちが感じられないしそういう行動も見えない。そもそも俺に気づいているのかもわからない。

何かをやっている人が多い気がする。

校庭をランニングする人、笑いながら廊下を走り抜ける人、ピアノを弾く人。ただ一人の例外は、階段で謝ってきた女。

わからない。わかる必要は、あるのか？

そんなわけのわからないものを、なぜ俺達は見ているのだろう。

たらりくらら、たらりくらら・・・たらりくらら、たらりくらら

携帯がチャルメラ。アラーム機能が起動した。早く止めないとエンドレスだ。カーテンの隙間から朝日が差し込む。

目を覚ました亮は、むっくり体を起こして頭を掻いた。漠然と寝入る直前まで考えていたことを思い出し、山名に聞いてみればいいということに気づかなかった昨夜の自分を笑った。

寝ぼけて考えることなんて、たかがしれてる。

朝からがつつりご飯を食べて電車に揺られて学校に着くと、いつも早い山名がいなかった。その空席はホームルームが始まって埋まらなかった。

遅刻をするような奴じゃないはずなのにと亮が思っていると、気の抜けた話し方で担任が山名の欠席を告げた。

昨日は元気だったのに。

欠席と聞いて、彼は即座に病気と決めつけた。風邪をひくには中途半端な季節だと思った。

見るともなしに空席を見ていた亮は、委員長に声をかけられた。

「昨日の夜から、山名の携帯と連絡がとれないんだけど、何か知らないか？」

知るわけない。

「なんで？ 具合悪くて寝込んでるんだろ？」

委員長は探るようにならずにいてもいないメガネの縁を押し上げた。

「本当に？」

「知らない。もっと山名と親しい奴に聞けよ。なんで俺に聞くんだよそんなこと。寝てるだけだろ？ 違うのかよ」

「佐々木君が唆したのでなければ、それでいい」

「どういう意味だよそれ」

濡れ衣着せられようとしていることだけわかった。

「そのまま。昨日、山名に最後に会ったのは、佐々木君のはずなんだ」

最後に会ったという言葉が何を言っているのか理解するのに時間がかかった。その時間に突如として小野が現れた。

「亮は鈍いな。だめじゃん、せつかく委員長墓穴掘ってくれてるのに」

委員長は振り返って口を開いて、邪魔するなとかうるさいとか、そういうことを言いたかったが、背後から無造作に抱きすくめられ、突然の登場と行為に驚いて言葉にならなかった。期待以上に驚いてもらったので、小野はしてやったりという顔で笑った。

「委員長の言葉から亮が読みとるべき情報は以下の通りです。一、山名は家にいない。二、委員長は山名がどこにいるか知らない。三、家族も知らない。四、一言で言えば家出。五、…委員長は亮に嫉妬している」

亮にはどうしてそうなるのか皆目検討がつかなかった。つかないが、委員長が激しく抵抗するところを見ると本当らしい。そんなことよりぬいぐるみのように同級生（男）を抱きしめる男子高生という図はそろそろやめて欲しい。

抵抗されるのが楽しいらしく、小野は悪のりしている。

「ここから亮が出すべき結論はただ一つ！」

「…なんだよ」

「教えない！ 言ったらつまらないだろ？」

亮は溜息をついた。

「いい加減離せ！」

委員長はまだもがいている。

「離してやれよ、暑苦しい」

やっと解放された委員長は、乱れたネクタイと髪を整えながら小野ではなく亮をキツとにらみつけた。

「ちよつと背が高いからっていい気になるなよ」

コンプレックスを掻きむしられてしまったらしい。亮の身長は約一八〇センチ。一七〇センチに足りない委員長はちやちな捨てぜりふを残して去っていった。

「委員長って、ああいうキャラだったっけか？」

「猫かぶって生きてるタイプだから。そういう人種は結構多いよ。」

あーゆー奴のは剥がすのが楽しいんだけどさ」

亮は死んでもいない委員長の冥福を祈った。

山名がいなくても日常は何もかわらない。教室を埋めるピースが欠けていても、全体には影響し当然なようで不思議な感覚を亮は味わった。

二時間目は世界史だ。なんてことだ、二十分かららずにヘレニズム時代が終わってしまった。それでいいのか三百年。アルキメデスは数学・物理学でなんだかすごい原理を発見した。首都はアレクサンドリア、共通語はコイネー。アレクサンドロス大王が東征してから三百年がヘレニズム時代。

歴史は何からできているのだろう。

執念深い妄想から？ 掘り当てた遺跡から？ その探し当てた物は本物？ 偽物からふくらませた想像は偽物？ 偽物だったとしても、そんなことが誰にわかる？

極端な話、教科書一冊、全部が真っ赤な嘘ということもありえる。教師は嘘を教え、俺達はテスト前には必死になって誰かがつくったホラ話を暗記する。最初に嘘をもっともらしく言った人は、きっと今頃本望だろう。

世界中が騙されている。

そこまで考えて楽しいと思える自分の精神が不思議だと亮は思う。誰かのでっちあげた壮大なストーリーは、類を見ないほどスケールがでかい。

楽しく世界史を終えて、その後の授業はダラダラと過ごした。

お経のような教師の声に邪魔されながら、小野が朝言ったことを吟味していた。

山名は家出した。

どうしてそういうことになるのか、道筋がまったく見えない。小野との会話ではよくあることだ。小野は数学で言うなら、答えが途中式より先にわかるタイプ。占いじゃあるまいし、と思うがいつも

当たっている。一種の才能、もしかしたら天才。でもどこかの親切な名探偵ではないから、いつも説明を省く。そしてついて来られない奴等を笑う。

嫌な奴だ。

そう思うのに嫌いじゃない。慣れと、笑いはしてもバカにはしていない態度のせいだ。

山名が家出。

それが本当だとして、俺に関係あるか？ あいつは今頃どこにいるんだろうな。

購買へパンを買いに行く途中、階段を下っていると山名がいた。「どうしたんだ？ 病欠じゃなかったのかよ」

亮は言ってから、おかしいと思った。その理由にすぐに気づく。山名は手ぶらだ。鞆を持っていない。

「…山名？」

急に昼休み独特の喧噪が遠くなる。

「僕は責められなければならない、そう思う。巻き込んだのは、始めたのは、たぶん僕だ。僕に関わりさえしなければ、…違う。君はたぶん何を見ようが何も思わないし、動じないだろう。僕が、見られたくないだけなんだ。それだけなんだ。どんなに取り繕っても、本当はそれだけなんだ」

「何を言ってるんだ？」

山名は俺に言っている。そうわかっている。山名は俺のすぐ目の前に立っている。なのに俺には山名の表情が見えない。

「手に入らないものを欲しがった。その罰は僕が受けるべきだった。なのに、どうしてだろう？ 僕だけいつも平和なんだ」

山名の肩を掴んで揺さぶった。もうほとんどこれが何かわかっていた。

亮の手に山名は自分の手を重ねた。

「それとも僕は、…僕は今も傍観者なのかな」

息がかかりそうなほど近くで触れあっているのに、見上げる顔は

間近にあるのに、亮には山名がどんな顔をしているのかわからない。
卵の殻のような肌も差し込む光に透ける髪もそこにあるのに。
重ねられた手に、温度はなかった。

「小野、保健室以外でさぼったことあるか？」

「ない」

教室で弁当を食べている彼に亮は声をかけた。

「結論までに二時間か。おまえにしちゃまあまあだな」

「そうか？」

「そうだよ。それに、このままかつてに出ていこうと思わないところだ、亮もこの学校の生徒だよな」

言われてみればその通りなので亮は黙っておく。

「一番穩便に学校を出るにはやっぱり保健室経由だろうな」

「どうする？ と楽しげに問いかける。

「成功報酬で2週間、亮は昼オレにジュースを奢る。やる気があるなら、取りあえず委員長連れといて」

ペットボトルの緑茶を飲みながら、安いもんだろ？ と笑った。

言われたとおりに連れてくると、彼はクラスの女子と楽しげにしゃべりをしていた。

「用って？」

委員長は躊躇せずにその間に割って入った。

「ああ、ちよつと話があつてね、山名のことなんだけどちよつといいか？」

無愛想だった委員長の顔つきが変わった。お預けをするようにそこで言葉を切って、小野は亮に話を振る。

「亮、柚木ちゃんにおまえのことは頼んどいたから」

ぼそぼそと何かを言い合った後、小野が廊下へ出ようと委員長に目配せする。亮が教室を出ていく2人を目で追っていると、その“柚木ちゃん”が遠慮がちにワイシャツの袖をツンツン引っ張った。

「あの、ええと、その…座ってくれますか？ そうじゃないと、や

りにくいから」

ちっこい。

改めて見下ろして、その身長差に亮は驚いた。久しぶりに小さな子供や猫を見かけた時と同じ感覚だ。彼女の動きはたどたどしい。ほんとに生きてるのか？ どっかに電池入ってるとかじゃなく？ 小野の席に、彼女と向かい合うように座る。立っている彼女と同じ目線で、亮は上から下まで彼女をまじまじと眺めた。

「柚木ちゃん」は真っ赤になって、持っていたポーチを取り落とした。化粧品がいくつか床に散らばった。
嫌な予感がした。

「柚木ちゃん天才！ 頼んでみて良かったよ。あ、ほら二人とも並んで、もつと寄って、亮は柚木ちゃんのこと引き寄せる感じで」

教室に戻ってきた小野は、携帯を取り出して俺達の写真を撮りだした。行動に脈絡がない。つつこみを入れるところだが、今は慣れないこの後で疲れていたからやめた。隣で委員長が苦虫をかみつぶしたような顔をしている。

ちゃらららん

撮影を終えると、小野は死にそうなくらい真っ赤になっている
「柚木ちゃん」に向かってにつこり笑った。

「じゃあ後でね。ほら亮、お礼言った？」

「アリガト、“柚木ちゃん”？」

柚木が名前なのか苗字なのか未だに亮はわかっていない。

首がもげそうなくらい激しく何度も首を振って、彼女はその場を走り去った。ドアに辿りつくまでに机と椅子に各二回ずつぶつかり、誰にともなく謝っていた。

「…おもしろい奴」

呟いた亮に残りの二人は非難するような視線を向けた。

「サナトリウムっぽくってオレはお願いしたんだ。亮は自分の顔

見た？」

気を取り直して小野が亮に言った。

結核患者風？

亮はそんな人を見たことがなかった。

「いや、見てない」

「委員長、どう見える？」

「……たしかに調子悪そうに見える」

上機嫌な小野と不機嫌な委員長に挟まれて、亮は疲れていた。他人にこんな顔に触られたのは初めてだった。

肌色のぬるつとした物を塗られたり、紺色の液体を筆からティッシュに移してそれで擦られたり、顔全体に青白い粉をはたかれた。抵抗したのに口紅を塗られゴシゴシふき取られたりもした。少し痛かった。

「おまえは何も言うなよ。オレが丸め込むから、具合が悪い振りしてるんだぞ」

三人で保健室に行くと、保健の先生は不在だった。ここで待つてると言つて小野が職員室へ走つていった。

「山名を探しに行くんだよな？」

「……ああ」

校内放送が流れるだけの、静かな廊下で委員長が悔しそうに言った。小野がどう言つたのかわからず、亮は短く肯定だけを伝えた。

「なんで佐々木君なんだよ？」

「それは……」

アイダが見える者同士だから。

それを言つたとして、堅そうな委員長が納得するとはとても思えなかったし、そもそもアイダのことを上手く説明できるとも亮には思えなかった。

「言わなくていい。小野君に聞いた」

亮は昼休みの喧噪が遠ざかっていく気がした。

「山名のことを探しに行きたいのは、佐々木君だけじゃない。でも

俺じゃだめなんだろう?」

委員長は溜息をついて頭を緩く振った。

「ところで佐々木君と山名はいつの間にそんな関係になったんだ?」

どんな関係だよ! と思っても口にできない。

「……先週の木曜……」

答えるのが苦しい。

誤解だ。絶対激しく誤った見解を委員長は持っている。問いただせないのが辛い。

亮は小野が委員長に何を吹き込んだかが、もの凄く気になった。

「こんなに上手くいつていいのかよ」

校門を出たところで亮は力無く呟いた。

「上手くいかないはずないだろ」

委員長が呆れた顔で宣った。亮が驚くほど先生方の委員長への信頼は篤かった。

「じゃあこれからしつかり山名を捜すように」

二人は駅で別れた。

あれから学校を出るまでの十数分で、亮はこの二人は絶対に敵に回すまいと誓った。小野の口は良く回った。それには少し劣るが委員長も理路整然と嘘をついた。本当に亮は一言も口を利かないまま学校を出てきた。職員室から先生を連れてきた小野の主張は大体こんなものだ。

知つての通り今日は保健医が不在だということ。亮の家は両親が共働きで迎えに来てくれるような人がいないこと。亮は吐くほど具合が悪かったが、今は少し落ち着いていること。だから今の内に家に帰りたいと亮が思っていること。

たたみ掛けるように言うだけ言うと、鞆を取ってきますと言って教室に走り去った。その場に担任と委員長と亮が残された。担任は帰らせた方が良くないと思いはしたが、どうしたものかその時はまだ態度を決めかねていた。三人は沈黙した。

ずっと俯いていた亮は、ワイシャツの脇を急にぐっと引つ張られ、不意をつかれてよろけた。

「佐々木君、大丈夫？」

引つ張った張本人はさも心配そうに言った。

「心配なんで駅まで付きそつてもいいですか？ 今からだつたら昼休みが終わる前にぎりぎり帰つてこられると思うんです。途中で倒

れたりしないか心配ですから。電車に乗ってしまえば座ってるだけですけど、それまでが心配なんです」

正義感に溢れた委員長らしい、クラスメイトを心底気にかけている顔で彼は担任を見上げた。担任はまだ日和を見るような顔をしている。

「佐々木はそんなに具合が悪いのか？ 朝は普通じゃなかったか？」
亮はその通りなので焦った。そこで平然としていられるほど彼の面の皮は厚くない。けれど言葉が見つけれないし、墓穴を掘りたくもないので、小野との約束通り黙って俯いていた。

「ええ、朝は大丈夫だろうと思って学校に来たらしいです。我慢している内に酷くなったとかで。さっき一回吐いて落ち着いたんですけど…。どうせ看病してくれる人がいないなら、本人が安心できるところが良いですし、それなら落ち着いている今の内が良いと思うんです」

「そうか、そんなにか」

病人相手にそういう言い方するんですか？ と言わんばかりの委員長の物言いと、疑われても反論しようとしてもしない亮の力無い姿に担任は納得し始めた。

「待たせた。じゃあ委員長、亮を頼んだ」

小野が現れたのは、たぶんこれ以上ないと言っくらいのタイミングだった。

「わかった。佐々木君、鞆来たから帰ろう？ 先生、ではちょっと行ってきます」

返事を待たず、小野から鞆を受け取った委員長は労るように亮の背中を押して下駄箱に向かった。担任教師は止めなかった。

サボリの片棒を委員長が担いだのが亮には意外だった。それ以上にどうやってここまで委員長を取り込んだのか、小野の手口が気になって仕方ない。

「俺が関わってあげた以上は、全部予定通りに進まないといけないんだ。ここまでは君たちの予定通りに運んであげた。だから佐々木

君は山名を見つけてこないといけない。…予定通りにね。見つけたらメールで連絡しろよ」

駅で別れてから、委員長と小野は似た者同士かもしれないと亮は思った。違うのは表面だけだ。

携帯に電話をかけたが、予想通り山名は出なかった。

『今どこにいる？』

ホームでメールを打ったが返信はない。高校の最寄り駅からは六駅の、付近で一番の繁華街に向かう電車に乗った。

『津田中央に向かつてる。サーティワンってあるか知らないか？約束通り明るい時間に食べに行こう』

しばらく考えてから送信すると、目的の駅に着いたのと同時に返信がきた。

『今は山手線を回っています。時間はかかるけどそちらに向かいます。それでいいですか？』

駅ビルの本屋かCDショップで待っているとメールを返した。

山名と連絡が取れて亮は少し安心した。

いつも学校にいる時間にこんな所にいるのは変な感じた。駅ビルの中を歩きながら亮は思う。自分と同年に見える人が意外という。制服姿もパラパラ見かける。

なんで、どうやって、みんな学校を抜け出てきたんだ？ サボリ？携帯が鳴った。

「もしもし？ 待たせてごめん。今駅に着いたから、もうすぐそっち行ける」

なくても構わない電話をかけてきた山名は、それなりに几帳面な性格なのかもしれない。ほどなくして彼は亮のところへやって来た。「山手線回るなんて酔狂なことよくやるな」

制服姿で悪びれもせず現れた山名に、開口一番言った。山名は苦笑するだけだった。

「電車の中が一番よく眠れるんだ。エアコン効いてて丁度よく揺れるし、人の気配がするから」

「人の気配？ …ところでおまえ、委員長のアドレス知ってるか？」
詳しく聞きたかったが、最初からそんな込み入ったことを尋ねるのは気が引けて、当たり障りのないところから始めることにした。
早退に協力してくれた彼に連絡するのは早い方が良い。

「委員長？ 大塚のこと？ 聞いてどうするの？」

「おまえ見つけたら連絡いれることになってる」

「だったら、僕がメールしとくよ」

二人で並んで、山名の携帯で写真を撮った。

「これ送っておけばいいでしょ」

文面を考えるのが面倒だったらしい。

「あー、それでサーティーワンだったけ？」

「そう。どこにあるかわかるか？」

一番最初に行こうって言ったのはおまえだろ、と亮がぼやく。

映画館とゲームセンターが入った建物に亮は連れて行かれた。その二階のフードコートの中にサーティーワンがあった。

「昼でも夜でも関係なくない？」

もっともな山名の言葉に彼は返す言葉がなかった。

サーティーワンは、平日のこんな時間の制服姿の男二人が行くには不適切だった。真っ白い壁とワッフルコーンにサクランボやバナナとデコレーションされたサンデーのポスター。オレンジがかったピンクのベンチに幼稚園児くらいの子供とその母親。店内に客は亮達の他にはその二人しかいなかった。亮と山名は浮いていた。

「佐々木は何にする？ 僕はバナナアンドストロベリーとチーズケーキとどっちにしようかな」

冷凍庫の中に色とりどりのアイスの入った筒状の容器が並んでいる。赤とピンクと黄色みの強いクリーム色をマールにした色のバナナアンドストロベリー。白にストロベリーソースを混ぜたチーズケーキ。どちらも大変甘そうだ。その向こうにニコニコとわざとらしい営業スマイルのお姉さんが立っている。

それにしてもここは冷房が効いている。

「決まった？」

「おまえは？」

白っぽい茶色のアイスにチョコレートチップが混ざっているアイ
スに決めた。

自分たちの存在と不釣り合いだと思いながら、二人はハキハキし
た色のベンチに座って話し始めた。

「今日学校で、おまえを見た」

「…そうか僕は、自分で思っているより意識してたんだ…。何か言
ってた？」

「ああ」

頷いた後、どう説明したらいいか悩んだ。それに山名があまりに
も平然としていて拍子抜けした。おまえの生き霊を見たと言ったも
同じなのだから、もっと違う反応を期待していた。

「欲しかった物って、何だ？ 手に入らない物を欲しがった罰を受
けたいみたいなこと言ってたぞ」

ボタツと嫌な音がして、山名のアイスクリームがコーンから落ち
た。まだ一口しか食べていなかったのに。

亮は啞然とした。まだ小さかった頃、母親に落とさないように注
意を受けたことはあった。けれど落としたことはなかった。落とし
ている場面に遭遇したこともなかった。

落とした山名も驚いて啞然としている。

二人は黙って、床に落ちたバナナストロベリーを見つめた。嫌な
間だ。

「もつたいない…。いきなり佐々木にこういう話するのは、本当に
照れるんだけど、…昔、従兄弟の彼女を好きだったことがあるんだ」
「従兄弟って、うちの高校の卒業生の？」

「そう、その人。ピアノが上手かった従兄弟。たぶん、僕はあの人
になりたかったんだ」

いつからとかなんでとか、そういうことは思い出そうとしても無
理だし意味がない、と山名は前置きのように言った。

「従兄弟のことを兄弟がいたらこんな感じかなって思ってた。面倒見のいい人だったし、僕は子供だったから従兄弟を何でもできるヒーローみたいに思ってた」

共働きの両親、兄弟もいない。寂しくないようにと習い事はたくさんやらされた。それでもふとできる一人だけの時間に思い浮かべるのは、母親でも父親でもなくその従兄弟だった。

「ピアノの先生の所に行く日は従兄弟の家に行く日だった。僕のレッスンの後が従兄弟のレッスンで、その後二人で従兄弟の家に帰ってた」

「いつの話だ？」

「七年前。もつと前から従兄弟の家には行ってたし、その後も行ってたけど。…その年の秋、従兄弟が高校二年生の時、従兄弟は学校の階段から落ちて怪我をしたんだ」

七年前、もう遠い昔と割り切った顔で淡々と話し続ける。

「従兄弟は孝巳って言うんだ。孝巳兄ちゃんの前から言ってたように、ピアノが凄く上手かった。趣味の範囲でしかやる気はないっていつも言ってたけど、本当のところはわからない。僕にはプロの演奏と同じに聞こえた」

子供だったんだねと彼は苦笑して付け加えた。

「高校二年まででピアノをやめるって、兄ちゃんは決めてた。だからその記念にコンクールに出ることにしたんだ。その最初で最後のコンクールが秋にあるはずだった。僕は残念だったけど楽しみだった。そんな僕と同じくらい楽しみにしてた人、それが孝巳兄ちゃんの彼女だった。兄ちゃんのことを本当に彼女は好きだった。だから僕は彼女のことを好きになった」

一度言葉を切って、山名は深く息を吸って短く吐き出す。胸の中の蟠りを解くように。それからはっきり言った。

「彼女はアイダの階段で今も、兄ちゃんに謝り続けてる」

12（前書き）

きりの良いところで切ったので、今回とっても短いです。

知られたくなかった。

誰かに詰って欲しかった。責めて欲しかった。

矛盾する感情はどちらも本当だった。七年間、ずっと後悔していた。でも誰にも言えなかった。きっかけがなかった。違う、勇気がなかった。

「コンクールには結局従兄弟は出られなかった。彼女を庇ったせいで階段から落ちて怪我をしたから。それで僕が彼女に言ったんだ。おまえのせいだって」

嬉しかった。佐々木がアイダに入れるとわかった時、それでも僕とあの空間を否定しなかった時。

「ちよつと待て、いろいろこんがらがってるけど。…山名はその従兄弟の彼女のことを好きだったんだよね？好きだったら、何でそんなことが言えたんだ？」

軽く頷くように俯いて、山名が答える。

「嫉妬した。そう言えば、彼女が自分からは二度と従兄弟に近づかないと思った。実際そうだった。だからって、僕が彼女の視界に入るわけじゃなかったのに。その時僕はそんなことわからなかったし、…本当はそんなことどうでもよかったんだ」

亮の困惑はますます深まる。

「七年経ってやっと自覚したことだけど、…僕は兄ちゃんを独り占めしたかった。だからそうできる彼女っていう立場に憧れたんだ。杉山美美っていう人格は問題じゃなかった。言い訳にもならないけど、…我が儘な子供だったんだ」

杉山という苗字に亮が反応する。山名の思った通りに。

「杉山って、生物室にいた…？」

「そう。あの先生。僕はあの先生に七年前おまえのせいだって言っ

た。今でも覚えてる。言われた時の先生の顔も、何も言えずに泣いてたことも。なのに、先生は僕を覚えてないんだ」

山名は溜息を飲み込んで笑った。

「先生にとって僕は記憶する価値のないものだったんだ。自分で自分を責めて、…それだけだったんだ。僕はメインキャストじゃなかったし、今もそれは変わらない」

思わず亮が目を逸らした床の上で、アイスが黄色とピンクの液体に変わろうとしていた。胸の支えが下りたのか、山名の声に翳りはない。

「佐々木は主役だったことある？」

「どうだろうな、考えたことない。…まあ、おまえは今から主役になればいいんじゃないか？」

「佐々木は考えることが単純だよ。なろうと思ったからって、なれるもんじゃないって」

「なろうと思わないとなれないんじゃないか？」

そうかなあ、と首を捻りながら山名は笑って見せた。

亮はさっきから表に出さないように気を使っではいるが、無理に笑う山名にイライラしていた。

他人の、従兄弟ではあるが自分以外の人間の、原因に多少関係したとはいえ、七年も前の別れ話に、なぜ今悩まされないといけないんだ。

「…清算しろ。してないんだろ？ だから引きずるんだ。従兄弟でも杉山先生でも、自分の言ったこと謝ってこい。怒られるにしろ許されるにしろ、決着をつける。じゃないとおまえずっと」

亮の言葉を遮って、山名が感情の抜け落ちた顔で言った。

「でも、従兄弟はもういないよ？」

「…いない？」

「大学生で一人暮らししてて、誰にも知られず一人で死んだ。そう、死んだんだ」

亮は彼が従兄弟に執着する理由がわかった気がした。死んでしま

った人を美化するのは簡単だ。

山名は自分の言葉に驚いたような顔をした。

探してた、ずっと。

亮に学校をサボらせて、懺悔するみたいに話を聞かせて。それでやっと山名は自分のしていたことを自覚した。

自分の知らない、遠い場所で死んでしまった従兄弟。脳の血管が切れたとか、不整脈が起きたとか、理由もはっきりしなかった。だから、またどこか遠いところから帰ってくるのだと、帰省するみたいにひよっこり現れるのだと、何となく信じていた。

従兄弟が死んだと知らせがあった時から三年。

帰ってくるとは、山名ももう思っていなかった。けれど一人暮らしを始めてからの従兄弟とは頻繁に会っていたわけではない。いなくなっただけから彼には変わらない日常が流れていく。

自分の行ったことのないどこかで、今も孝巳兄ちゃんは生きている。

それが信じられなくなるようなことは、三年間に一度だって起こらなかった。

彼は従兄弟を捜してこの学校へやって来て、信じる根拠を収集していた。思っ力に引き寄せられて、あるはずなのに証拠はいくつか集まった。

それさえあれば、彼はいつまでだって信じ込んでいられるはずだった。自分で証拠になると思えるものだけあればよかった。

今も孝巳はピアノを弾いている。

それが信じるための一番大きな理由だった。硬く四角い石の下の死人は、楽しそうにピアノなんか弾かない。

ほとんど毎週ピアノを聞きに行った。従兄弟に会いに行くような感覚で。毎週ピアノを習いに行っていた昔と変わらない気持ちで。

昨日、初めて他人を連れて行った。孝巳はいつものようにトロイメライを弾いていて、夜が来ていつものように消えた。

佐々木と、暗い音楽室に二人。

見えても、それだけ。孝巳兄ちゃんは、ここにいてはいけないんだ。

隣に人がいることで、山名彰はやっとそれがわかった。佐々木亮の存在が孝巳の不在を際立たせた。

横にいるのは佐々木だけ。…そーゆーこと。

昨日電車の中で一人になって、彰は自分がどこに行けばいいのかわからなくなった。もちろん自分が学校からの帰宅途中で、家に向かっているということはわかっている。ただ、なんで家に帰るのかわからなかった。帰りたくないわけじゃなかった。帰る理由が思い浮かばなかった。

どうせ家には誰もいないし、一晩くらいいなくても、この歳の男なら心配しないだろう。

夜の町に出て、だけどやりたいことも特になく、暇潰ししかできなかった。つまらない人間だよなと彰は思う。今までやってきたことを思い出そうとしても、自分にできたことなんて一つもなかったように思える。

何がしたいんだろ？

わかっていてる人の方が少ないような問いを彰は自分に投げる。

去年はよかった。勉強さえしていれば、それ以上何も考えなくてよかった。生活にも人生にも影響のなさそうな問題を解く、紙の上でゲームをしているだけでよかった。嫌になる時もあったけど、今は戻りたい。

なぜあんなに一生懸命勉強していたんだろ？

答えは嫌になるほど簡単だ。昭英高校に、孝巳と同じ学校に入ってたから。

「清算しろ」

言うのはすぐだ。彰は佐々木に内心反発した。けれど自分より彼が正しいことを頭ではわかっている。

いい加減、現実を直視するべきだ。

「従兄弟が、死…他界してるってことは、昨日見たのは、幽霊…？」
気を遣ってか、婉曲表現を使った佐々木が顔を青くしている。

「違うんじゃない？ 杉山先生や僕のことアイダで見ただろ？
それに幽霊になって化けて出る、原因の魂なんかないんだから」

「ないのか？ 魂は」

「見たことある？ 自分の目で見たものは信じるけど、見たことないものは簡単に信じるものじゃない」

言いながら、反論を待つてる自分を感じる。目で見たものなら信じるという行動原理は危ない。世の中には目に見えないものがたくさんある。

それが友情や愛情だなんて偽善しゃぶったことは彰は考えていない。

見えないけどあるもの、関係性がそれだと思う。家族には血の繋がりはあるけれど、その繋がりは目には見えない。友達には血の繋がりがさえないけれど、なにがしかの結びつきがある。それが友情が利己心か、判断できない時もある。でもそこには何かがある。

名前がないということの不安を彰は知っている。定義できないものは輪郭がつかめない。そっと触れるだけで壊れてしまうものなのか、手を滑らせても壊れないものなのか。

友情とか愛情とかそーゆーものは、便宜上つけた単なる名前。ほんととは一個一個違うものを、安心するために型にはめた。僕が夢と言うにはリアルで、現実と言うには不安定な空間をアイダと名付けたみたい。

「魂は見えるものなのか？」

「さあ？」

彰は笑い出したくなる息を抑えて首を捻る。

断定的に喋りながら、それを正されるのを期待している。一般的で正しいコミュニケーションの取り方と、自分がしていることがずれていることに彰は気づいている。

正しさなんか必要じゃない。今すぐ違うと言って欲しい。僕が言

った言葉を否定して、僕が考えていることを君の口から言っ
て欲しい。それを僕は望んでる。

「話が逸れた。きつかけを作つといて悪いけど、魂と幽霊の話は止そう」

佐々木は僕の望んだものとも予想したものとも違う反応をする。床の上で、液体になったアイスクリームがまだらなピンクの水たまりをつくっている。

「ほとんどアイス食べられなかったけど、いいのか？」

視線の先を見て、佐々木が興奮した彰を宥めるように問いかける。のどが乾いたと言って彰は席を立つ。その背中を佐々木はじつと見つめていた。

「山名は杉山先生に音楽室で従兄弟がピアノを弾いているって言ったこと、あるのか？」

席に着いた彰に、真剣に佐々木が問いただす。

「……ない。放課後の音楽室からトロイメライが聞こえる。そういう噂があるとは言った。僕がアイダに入るってことも言った。……それから、部活の後に二人で音楽室に行った。春で、今より日が短かったから、孝巳兄ちゃんが見れるわけないのに」

科学同好会の顧問と部員。周囲に違和感を持たせずに同じ時間に教室を出るのは簡単だった。

そうやって彰は杉山に、自分には会えないのだと思い込ませた。けれど彼女はそれでもめげなかった。校内の怪談話を集めて、会う方法がないか情報を集めようとした。彼女の言う『学校の七不思議をつくりたい』は、全くの嘘ではなかったが本当でもなかった。そう言うっておけば、生徒達がおもしろがって噂話を持ってくる。そう思ったから公言しているのだ。

「おまえ、最低」

「知ってる。知ってるけど――、もし二人が会って、また孝巳兄ちゃんがいなくなったら、……いなくなったらどうしたらいい？」

ストローを無闇に動かして、氷をガサガサと音を立ててかき回す。
「どうもしなくていいんじゃないか？ …おまえが今まで間違ってたんだ。いないのが正しい状態だって、受け入れればいいんじゃないか？ その方がいい」

もつと言つて欲しい。

僕が意識化するのを恐れていたことを、君の言葉で確定して、僕が口にできない正論を、君の言葉で語つて欲しい。

「佐々木は大人すぎる。それに、正しい時間に連れて行つたとして、先生が孝巳兄ちゃんを見れるとは限らない。だったら、会わせなくてもいいはずだ」

「それとこれとは違う。見えるかどうかはやってみないとわからない」

彰につられて、佐々木も声を荒げる。彼は今、自分が小野や委員長のように口が回らないことを、心底悔しく思っている。

「見えるかどうかは、関係ない。そんなことはどうだっていい。おまえの従兄弟が消えようとするうと、俺には関係ない。でもおまえは、杉山にした自分の行動が間違つてたつて思うんだろ？ 七年前と同じで」

「違う！」

「違う。同じ間違いをくり返してる。…だから俺に話すんだろ？」

違うか？ そう言つた佐々木が自分をどのくらい理解しているのか、彰にはわからなくなつた。彼はごく浅いところまでしか、今まで自分を見せたことがないつもりだった。彰にとって佐々木はアイダを見られるただ一人の人だったから、浮かれている部分はあつたかもしれない。それでも一定の距離を置くようにしていた。

みんなそうだ。彰はどんなに近づいても、必ず一定のラインからは踏み込ませないようにしていた。そして彼自身も相手の内側に入り込まないように注意深く距離をとっていた。

親しくなればなるほど、相手を独占したくなる。友情も愛情も関

係ない。

七年前の後悔から、彰は誰かに強い感情を抱くことを警戒していた。彼の心は小学生の子供の時のまま、封をされて沈められていた。だから好悪の感情とその強さはわかって、その区別まではできない。

佐々木に理解されているなんていう幻想は持ちたくない。幻滅し
たくないから。

自分が佐々木に好意を、それも強い好意を持っていることに彰は
初めて気がついた。逃げ出したくなった。

いつの間にかアイスを食べ終わっていた佐々木が、口の中が甘い
と言いながら彰のウーロン茶を奪って、氷をばりばり食べた。彰は
自分のウーロン茶が取られたというのに、何の反応もしなかった。

「僕たちがアイダに入る理由って、何だろう？」

急だった。話を逸らされたと思い、佐々木は口の中に氷を入れた
まま眉を寄せた。

「それは杉山先生にもあると思う？」

難しい顔のまま、音を立てて佐々木は氷を噛み砕いて口を開いた。
「たぶん。音楽室でピアノを弾くおまえの従兄弟と杉山先生に、そ
ういう因縁があるなら。先生は見ると思う」

「その根拠は？」

問いかけながら、彰は自分の顔が強ばるのを感じた。

聞くのが怖い。錯覚してしまいそうで。僕と佐々木とが同じもの
だと。

「生きてるものも、そうじゃないものも、無機物も、同じように動
いて見えるならそれでいい。そう考えているから、俺達はアイダに
入る、たぶん。先生は、ピアノを弾ける彼ならどんな存在でもいい
と思ってるはずだ。だから――」

「だから怪談話を集めてるし、アイダにも入りたがってる。…そー
なんだろっね、きつと」

彰は溜息をついた。物わকারのいい大人にはなれそうもなかった

けれど、我が儘な子供のままでもいられない。タイムリミットは目の前に迫っていて、心の準備を待ってくれそうにもなかった。

錯覚でも幻想でも、裏切られるまでは信じてもいいと、自分に許そう。信じるという言葉は、偽善のにおいがするけれど。

「今度の水曜日、先生をアイダに連れて行こう。…佐々木、手伝ってくれろ？」

一人では踏み出せない。そのことを彰はよくわかっていた。だからハッキリいつと決めて宣言した。

「わかった」

頷く佐々木が彰の決心をどのくらい理解しているのかはわからない。

小さな宣言のための儀式として、彰は残りのウーロン茶を飲み干した。

15（前書き）

きりの良いところにしたら、とても短くなってしまいました。

「音楽室の幽霊の噂を知ってますか？」

昼休みの生物準備室に亮はやって来た。杉山が例の特製サイフォンでコーヒーを淹れながら一人でお昼を食べていると、彼に教えたのは小野だ。

「何それ？ 知らない」

弁当をひろげて箸を持ったままの杉山は目を大きく開いて、立ったままの亮を首を傾げるように見上げた。

「先生がいかにも好きそうな話。先々週、あの骨格標本で撮った俺の映像データを破棄するかくれるかしたら教えます」

何か不都合があるのか、一瞬まぬけな顔をした。

「え、あれ？」

「なにかあるんですか」

「いやちよつと、…結構気に入ってたから」

彼女は一度渋って見せたが、ただのポーズだったらしくすぐにCD-Rを棚から出した。

そんなすぐ出せるような所に自分の驚いている映像がしまわれていたことが亮は嫌だった。

たぶん変な顔をしている。何回ぐらい見たんだろ、この人。まさか人に見せてないだろうな。嫌な予感。

「コピー作ってないですか？」

そんなことやってないと、しきりと否定する杉山にうるんな目を向けて、亮はそのCD-Rを受け取った。

「渡したんだから、早く教えて？」

「…いいですけど」

話す予定でここに来たというのに、亮は釈然としない。首を振って頭を切り換えた。

「曜日限定の幽霊なんです。水曜日の夕方。薄暗い時間にその幽霊

は現れる。昼でも夜でもない時間だけ、短い時間だけ現れる男子生徒の幽霊が、ピアノを弾くって話です」

その幽霊が何だか知っていることがばれないかと、わざわざこんな話をしに来ることが怪しまれないかとヒヤヒヤしながら、素知らぬ顔で亮は話す。杉山が無表情になっていくのを見ながら、幽霊のくせに水曜日だけってどういうことでしょうねと付け足した。

「水曜日…は吹奏楽部の部活がない日だからでしょ」

杉山は亮の方を向いて、どこか遠いところを見ている。

これで絶対水曜日は音楽室に来る。確かめずにはいられなくなる。亮は生物準備室のドアを閉めた。

「水曜日の放課後、従兄弟は音楽室でピアノを弾いてたって。グラインドピアノを弾ける機会はあるまいないんだ。…たぶん彼女は、その時一緒にいたんじゃないかな」

協力を頼まれてからの彰の説明を思い出す。彼のやりたいこと、その理由、俺の役割。

亮が彰に頼まれた役割は二つ。悟られずに、今度の水曜日に音楽室へ杉山が行くように仕向けること。音楽室に杉山が入った後、邪魔が入らないように見張ること。ただし彼自身は、もう一つ自分の仕事が残っていると思っている。

取りあえずこれで、頼まれた仕事の半分は終わった。

「それでおまえは何をするつもりなんだ？」

「杉山先生の神経を逆なですること」

意味深な返事だけで、何をするのか亮にはわからなかった。

16（前書き）

視点が杉山先生です。

もちろんあんな話を鵜呑みにしたわけじゃないのよ？ 私は高校生じゃないんだから。よくある音楽室の怪談を信じ込んだりはしない。ただ確認をしに、そう！ 男子生徒が本当に現れるのか、現れるならそれが誰なのか、ちょっと確認しに行くだけ。無責任な噂が広まったりしないように、教師として確認しておく義務があるからそれ以上の興味なんてないの。

春先に山名君も似たような噂を覚えてくれたけど、男子生徒なんか現れなかった。あれは何曜日だったっけ。アイダとか呼んでる不思議空間に入れちゃう山名君が一緒でも見られなかった。時間が悪かったのかも。昼でも夜でもない時間、黄昏時。今の高校生は言葉を知らないの？

滑稽なほど自分に言い訳をしながら、彼女は水曜日を迎えた。

その日、彼女が顧問を務める科学同好会の空気は重く沈滞していた。

杉山にとっては朝からじりじり待つてやっと辿りついた放課後。部活の時間が早く過ぎてしまわないかと、時計ばかりが気になる。生徒達は不在の人物が現れないかと扉ばかりを眺めている。

山名彰が授業には出ていたのに部活を無断で休んでいる。サボリだ。彼自身は喻え部活に出ても、元気いっぱい活動をするということはない。しかし山名彰の周囲への影響は、部内限定で言えば絶大だ。つかみ所のないキャラクターのため表だって構い倒すような強者はまだ現れていないが、ほぼ全員が口実を見つけては彼の近くをいそいそと楽しみに動き回る。科学同好会のメンバーは、疑問を全く持たずに山名彰を特別扱いしている。

例えば生物準備室の科学同好会部員用の戸棚の中には、山名彰専用おやつ箱がある。彼が気づかないうちに存在が定着してしまったその箱は空になったことがない。彼が中身を入れたことはないのに。

部活に行くに必ずその箱がどこからか登場しお菓子を渡されることに、彼はそろそろ疑問を感じるべきだ。因みにお菓子を渡す係りは公平を期するため当番制だ。

愛玩動物を餌づけしたくなるような気持なのかもしれない。彼の茶色みがかった髪と瞳はアビシニアンを連想させる。水分含有率の高そうな潤んだような猫目は頼りなげな視線で、いつも何かを探している。周りをほっとけない気持にさせる。それは男女に関係ない。そんな、みんなのマスコットの不在。

今現在、この教室の中にやる気のある人間は存在しない。

「杉山センサー、山名君がどうしたか聞いてないですか？」

部長に聞かれても首を横に振る以外することがない。気持ちを落ち着けるため、杉山はコーヒーを淹れることにする。

「あ、いーなー、私も欲しい」

私もわたしもと言う声がいくつも挙がる。

「じゃあ今日は特別だからね、飲みたい人、手挙げて」

人数分の豆をセットして、アルコールランプに火をつける。揺らぐ炎を見つめて、彼女はいつの間にか自分の高校時代を思い出していた。

悲しいこと楽しいこと、どちらもあった。一言で言い表すことはできないし、単純にいい思い出に分類することもできない。戻りたいたと思っただけなんて一度もない。でも、やり直したいと願ったことなら、何度もある。

もし叶うなら、今度は孝巳に近づいたりしない。

絶対に叶わない。過去は変えられない。よく知っているのに、彼女は今でも彼のことを考える時、そんなことを思う。

自分を庇って彼が怪我をしてしまったこと。それも一生に一度と思い定めたコンクールの直前。今でも悔やまずにいられない。

それなのに音楽室の幽霊が孝巳だったらいいのにと、期待している自分に気づいている。それが矛盾しているということも。

しかたない。私は孝巳に会いたいし、同じくらい会いたくない。

あの時の後悔があるから、高校を卒業した後は一度も連絡を取ろうとしなかった。けれども音楽室に幽霊がでると聞くと、それを確かめたいと思うてしまう。

リアルの彼に会うのは怖かったけど、思い出のよすがは欲しい。

七年前孝巳は、残念に思っていないはずがないのに私を許してくれた。私は自分が許せなかった。みんな私を責めようとしなかった、ただ一人を除いて。言ったのは小さな男の子だった。

「おまえのせいだ」

涙の滲んだ声で、凄く悔しそうに。

これが本当なんだと思った。周りはみんな嘘をついていて、その子だけが私に本当のことを言っているんだと思った。私に聞こえないところで、みんなが私を非難しているはずだった。孝巳も例外じゃない。孝巳こそ私を責めるはずだった。

なのに彼は優しくかった。私は自分が許せなかった。

そういえば噂話を持ってきた山名君の友達は、どことなく印象が孝巳に似ていたような気がする。どことは言えないけれど。

やる気のない部活時間を切り上げて生徒達を解散させ、急いで彼女は音楽室へ向かった。白い壁が夕日を受けて鈍い朱色にそまっている。

もどかしい思いで二重のドアを開くと、懐かしさが溢れてきた。

「優しい響きだろ？ トロイメライは、夢っていう意味なんだ。…

どんな夢だと思う？」

あの時私はなんて答えた？

思い出せない。でも、そんなことはどうでもいい。本当に、孝巳がここにいるんだから。高校生の時の、七年前のままの孝巳。怪我が治った後も、彼はピアノを弾かなかった。そして受験を理由にピアノをやめてしまった。やめたこともその理由も、私は人伝に聞いた。

七年ぶりの彼のトロイメライ。

なのに突然音が途切れた。

「早かったですね、先生。部活はどうしたんですか？」
椅子から立ち上がった孝巳が、山名彰がそう言った。

咄嗟に言葉が出ない。首に針金を巻き付けて思い切り引っ張るところをイメージした。

杉山は白い肌に針金がかくい込む様子や赤黒い色まで想像して、自分が怒っていることに思い至った。

「どういうこと？ 友達まで巻き込んで、私をはめて！ 何がしたいの！」

怒っているのは杉山なのに山名が彼女を睨みつけ、その表情とは裏腹に淡々と話し出した。

「その様子だと、僕のことを思い出したんですね」
「思い出すって何を」

「…七年前にここで中川孝巳がピアノを弾いていたことを僕は知ってる。そのことに疑問は感じないんですか？」

「何で孝巳のことを…」

「僕がたまたまここでピアノを弾いていただけだったら、怒鳴られ損ですね。思い出したから怒ってるのかと思いました。…中川孝巳と僕は母方の従兄弟同士です。先生と僕は昔、何度も会ってるんですよ？ 先生は覚えていないみたいですけど」

八歳も年下の子供にとつての昔は、どのくらいの期間のことだろう。

「僕は驚いていたんです。この学校に入学して、先生に会って。先生は孝巳兄ちゃんが…死んだことを知っていた。怪談話を集めて兄ちゃんの幽霊を探しているってことは、そーゆーことですよね？」

「孝巳兄ちゃん」その呼び方に覚えがあった。孝巳の弟は彼をそんな風には呼んでいなかった。彼にまわりつくのを何度も見た、小さな子供。その子だけが、彼をそう呼んだ。

「先生は七年前の兄ちゃんの怪我のことを、凄く気にしていた。今でも後悔してる。…大昔の、高校生の時の彼氏のことなんか、きつ

と忘れてると思ってました」

「忘れるはずない。新しく恋人ができて、孝巳は特別だった。勝手なこと言わないで」

髪を振り乱さんばかりの杉山に比べて、山名は生きていないみたいに凧いでいた。

「今日、ここに来てもらったのは…先生に謝ろうと思ったからです」「謝る？」

「僕の独占欲が先生を追いつめたことを。従兄弟の怪我を先生のせいだって責めたのは僕です。先生のせいじゃなかったのに。…ごめんなさい」

ほぼ九十度に山名が頭を下げた。杉山はそれには目もくれない。

「私のせいだった！ 私を庇って…」

彼女は顔を覆って涙ぐむ。山名は顔を上げて溜息を飲み込んだ。

「僕もそう思ってた。でも、そこで先生を助けようとしなかったら、それは孝巳兄ちゃんじゃない。だから先生は気にしないで。兄ちゃんも気にしてなかった。責めたいなんて思ってたんだから」

「そんなのわからない。孝巳は死んじゃったんだから。死んだ人の気持ちなんて、誰にもわからないんだから」

孝巳は彼女に優しくかった。けれど彼の行動の裏まで読めていた自信は彼女にない。

「そうですか？ 本当に？」

ピアノの音がした。

夢だと思った。

立ち上がった山名の隣、ピアノにセットされた椅子に男子生徒が座っている。

「孝巳…」

懐かしい響き。名前を呼んで、それ以上言葉にできなかった。

「…嘘」

トロイメライ、くり返されるメロディー、一ページしかない短い曲。初めて弾いてくれた時から好きになった。孝巳がいつも私のた

めに弾いてくれた曲。

一度通して弾いた後、孝巳は鍵盤から目を上げて杉山を見て微笑んだ。

彰はその光景を見るのが、本当は嫌だった。高校時代に何度も繰り返したはずの放課後を再現する二人が堪えられそうになかった。

それでも日が落ちるまで、彼は音楽室の後ろの方の机に行儀悪く腰掛けて、二人を見守った。アイダで孝巳を見るのは、今日が最後と決めていたから。

「？ 孝巳？」

夜が来て音楽と共に孝巳が消える。杉山が泣きそうな不安な声で名前を呼ぶ。

「アイダの時間は終わったんです。僕は帰ります。その楽譜は先生の物にしてください」

杉山の真正面に立ってそれだけ言うと、後ろを振り返らないように注意してドアに向かった。

「…楽譜？」

ドアノブを強い力で握って立ち止まる。

「孝巳兄ちゃんのトロイメライの楽譜です。先生は兄ちゃんがピアノをやめた理由を知ってますか？」

「受験のためでしょ？」

「それなら気分転換に弾くことだってできたんです。あの後、一度も鍵盤に触れなかったのは、…聞いて欲しい人がそばにいてくれなくなっただけからです」

背中で泣き声を聞いても、彰は振り向かなかった。

二重のドアを通り抜けた。

「お疲れさん。…大丈夫か？」

ドアのすぐ横で、大きな体を小さくして亮が彰を見上げていた。
「何やってるの？」

「見張つてろつて言ったのおまえだろ。立ってんの疲れたから座つてる」

「ふーん」と気のない返事だけで、亮を置いて彰は廊下を歩いていつてしまふ。どちらかといえばいつでもものんびりと動く彼にしては珍しい程の速度で。亮は慌てて立ち上がり、バランスを崩しながらも彼を追いかける。空っぽの学校の暗い廊下に、二人分の足音が高く響く。

「…時間は、何にでも効く薬だと、佐々木は思う？ 僕はずっと、それは嘘だと思つてた。でも今日、それが本当だったらいいのについて思つたんだ。僕は今日を忘れたい」

追いついてくるのを待つように立ち止まって、前を向いたまま彰が言つた。

廊下のずっと向こうに非常口の緑の光が見える。窓の外の高層ビルにポツポツと明かりが灯つている。どちらも光源としては頼りない。彰の横顔さえ照らしてくれない。

それでも亮にはわかつた。

「忘れるつて…？ 泣いてる？」

「泣いてない」

嘘だ。

それならなぜ一度も振り向かない？ 顔を覗きこまれるのを嫌がる？ それに、呼吸が乱れている。音を立てるくらい必死になつて息を吸つて、その割に息を吐く時間が短すぎる。

「そうか、なら深呼吸しろ。こつちが息苦しい。…でもきつとおまえは今日のことを忘れない。賭けたつていい。忘れないよ。七年越しで失恋したんだから。…やけ食いするか？」

「しないよ、みつともない。失恋、そうかもね。そうだ明日の放課後せつかくだからつき合つてくれないか？」

「やけ食い？」

「違う。階段にもう高校生の杉山先生がいなくて、確認したいんだ」

「音楽室も見に行くのか？」

行かないよ、そうあんまりあつさり告げられて、亮は拍子抜けした。一週間やそこらで整理が付くような気持ではなかったはずなのに、彰が自然な調子でそう言ったから、亮はもう終わったことだと今までのことを片づけることにした。

「音楽室で先生と二人で何してたんだ？」

「ピアノをちよつとね。そういえば僕もあの曲、トロイメライが弾けるって言ったっけ？」

聞いていないと首を振る。

「昔どうしても弾けるようになりたいって、ねだって教えてもらったんだ。強弱の付け方とかクセとか、全部真似して覚えた」

誰にとは亮も聞かない。当時の僕にはすごく難しかったと、懐かしむような呟きが零れる。

「俺にも弾いてくれ」

軽い調子で亮が頼めば、ヤダよと言って彰が笑う。透明に朗らかな声で。

「失恋記念にもう二度と弾かないってどうだろう？ 弾かなかったら、すぐ弾けなくなるから。その頃には僕も、今日のことを思い出にできてるかな？」

誰もいない階段に、二人分の軽い足音が響いた。

17（後書き）

やっと終わりました。

最後までお付き合い頂いた方、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2054b/>

トロイメライを忘れる日まで

2010年10月8日15時34分発行